

## 5.救命救急関連

臨床評価指標項目	2017(平成29)年度			2018(平成30)年度			2019(平成31/令和元)年度		
	実数	母数	割合	実数	母数	割合	実数	母数	割合
救急車搬送件数	5,643			6,423			5,920		
救急来院患者総数	22,477			23,682			22,789		
内)救急外来患者数(救急外来で帰宅した患者)	17,685			18,107			17,704		
内)救急入院患者数-割合	4,792	22,477	21.3%	5,575	23,682	23.5%	5,085	22,789	22.3%
院外心停止患者数	536			516			563		
重篤*1患者数	1,037			1,127			1,207		
救急救命士 病院実習受入数	73			57			74		

### 解説

【救急車搬送件数・救急来院患者総数(救急外来入院患者数)・重篤\*1患者数について】

平成31/令和元年度は年度末の新型コロナの影響により、やや救急患者数の減少が見られました。当院は、生命に直結する重症\*2～重篤\*1な患者さんを主に受け入れる救命救急センター(3次救急病院)であるとともに、軽症～中等症である1次、2次救急患者さんの診療も行う北米型ER\*3として活動しており、川崎市北部の救急患者さんを出来る限り受け入れる方針をとっています。今後も地域の救急指定病院とも連携を強化し、より多くの重篤\*1患者さんの治療ができるようにしていきます。

【救急救命士 病院実習受入数について】

救急車に乗車し、軽症、中等症はもちろん、重篤\*1な患者さんに対して医学的処置(心臓呼吸の止まったいわゆる「心肺停止の患者さん」に人工呼吸をする、強心剤を注射するなどの処置)を行う救急救命士は、今や救急医療には欠かせない医療職です。

当センターでは、救急救命士の病院実習受け入れは、各消防局からの要請通りに制限することなく受け入れており、その増減は各消防局の新規採用数や認定救命士の計画に因ります。また各消防署に出向いて、訓練指導、講義なども積極的に行っています。

川崎市は政令指定都市であり、比較的医療施設には恵まれています。救急救命士の医学的知識、技能を指導、助言するのも救急医にとっては大切な仕事であり、また救急救命士と救急医との関係は、医師が救急救命士と直接電話で交信し、指導、助言をすることで、病院までの搬送の間の医学的処置を円滑にすること、また病院の選定(患者さんをどこの病院に運ぶか)など、非常に重要なパートナーであり、今後も積極的に協力体制を維持してまいります。

\*1 重篤 危篤状態のことです。

\*2 重症 重い病気のことです。

\*3 北米型 ER 365日全ての救急患者を受け入れ、ER専門医によって全科の診断および初期治療を行い、各専門家にコンサルタントするシステムです。

**RRS 月毎発生件数**

年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
2017(平成 29)年度	10	11	20	16	10	14	14	15	22	17	14	12	175
2018(平成 30)年度	12	6	13	20	12	5	11	9	16	12	20	17	153
2019(平成 31/令和元)年度	12	16	16	15	15	17	18	21	21	13	18	11	193

**解説**

入院患者さんの容態が急に悪化した場合、従来は、まず各診療科の主治医が対応し、その容態に応じて専門の他科の医師が対応するのが通例でした。しかし、命に係わる場合、呼吸状態(息が出来て酸素が肺に届いているか)、循環状態(酸素を含んだ血液が血圧とともに十分に臓器に届いているか)、意識状態などの対応は、どの患者さんにも共通であり、かつ、大勢の医療スタッフが必要な場合が多く、日頃から重篤患者さんの治療をしている救急集中治療医が得意とするところです。

RRS(Rapid Response System)は、全国の病院に先駆けて聖マリアンナ医科大学病院が取り入れたシステムで、入院中の患者さんの容態が予想外に急変した場合、各科主治医が躊躇することなく診療科の壁を越えてすぐに救急集中治療医に応援要請できるシステムです。これにより容態急変に対して今まで以上に安全に対応することができるようになりました。今後も各診療科との連携を強化し、安全な病院を目指してまいります。